

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第83号

平成31年2月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

文政9年(1826)、シーボルト著「江戸参府紀行」に残る正成像

嗚呼忠臣楠子之墓に詣で「かの有名な戦士」と 正成を名将、神と崇められた武将とも記す

楠公像が今や忘れられている

1月11日(金)、産経新聞のロングラン特集「日本人の心 楠木正成を読み解く」が始まった。

その冒頭は以下の書き出しで始まる。

一 皇居外苑の一角に巨大なブロンズ像が立つ。「馬場先門の楠公像」。前脚を上げる軍馬の手綱を引いた甲冑姿の楠公こと楠木正成の銅像だ。明治33年に住友家から宮内省に献納され、制作中には明治天皇がご覧になった。戦前は、上野の西郷隆盛像、靖国神社の大村益次郎像と並ぶ「東京の三大銅像」として人気を博した。

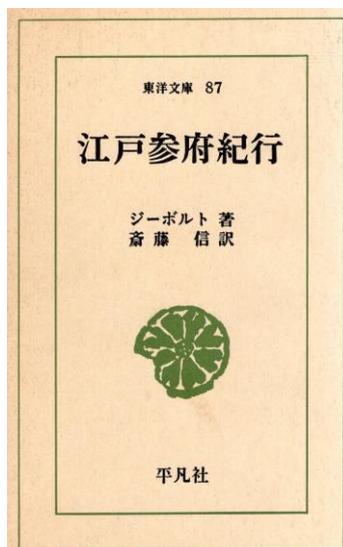
現在、銅像のそばには大型観光バスの駐車場がある。1日平均200台ものバスが発着するが、「ほとんどの人が銅像が正成とは知らない」(国民公園協会皇居外苑楠公・北の丸の原利裕管理者補佐)。かつての東京名所、楠公像は今や忘れられている。

シーボルトが残した「江戸参府紀行」

戦後、教科書から姿を消し、楠木正成や正行が、今の時代、多くの人の頭から忘れ去られてきた様子が、この一節でよく分かる。

扇谷は、正行顕彰の活動を進める上で、有名な外国人が、「わたしは正成、正行を知っている」とか「正成、正行はこんな武将である」と語っていないか、との思いを強くしていた。

湊川神社社務所発行の



「大楠公」(平成21年7月1日改訂初版)の「大楠公年譜」文政9年(1826)の項に「2月4日(新暦3月12日)、シーボルト、この地を過ぎ御墓所の状況を旅行記『江戸参府紀行』に記す。」と書かれていることを思いだし、江戸参府紀行を取り寄せた。



平凡社刊東洋文庫

87「江戸参府紀行ーシーボルト著・斎藤信訳」は、文政6年(1823)、長崎の出島商館医員に任じられたシーボルトが長崎に入り、文政12年(1829)に日本を去るまでの間、文政9年(1826)の2月15日に長崎を発ち、4月10日に江戸到着、そして江戸に5月18日まで滞在し、7月7日に長崎に帰るまでの旅日記である。

この江戸参府紀行の、3月12日(旧暦2月4日)の項に、以下、楠木正成に関する記述が残る。

朝8時に立ち、たいへん住民が多いように見える町を徒歩で通った。住民はほとんど教養のない様子で、案内人は時々杖を挙げねばならぬほどであった。町筋には普通の小売店ばかり軒を並べ、住まいはみすばらしい外観をしている。

兵庫の近くで我々はある長い村を通り過ぎた。歯医者や二セ医者があるので評判が悪く、歯を抜いた頭蓋が誇大広告と一緒に窓の前に出た。

近くにかの有名な戦士楠木正成の墓がある。

彼は歯痛の守護神であるから、墓は歯の痛む人人を引き付ける。この名将の墓は、蔭の深い森の中であり、花崗岩で作られた記念碑が墓所に美しさを添え、その上に神社の形をした小さい建物が立ち、

前方に格子がついて、たくさんの小さい絵馬がかかっている。

またヒノキを用いて作った小さい三方に、ぶつりと切り、よく手入れたマゲをのせ、髪を切った人の名をそれに添えてあるのが、私の注意を引いた。

楠木正成は船乗りの守護神でもあったから、暴風雨とか難破の時には船人は祈願を行い、神と崇められた武將に最も大切な自分の鬘を供えるのである。

なんと、ほとんどの日本人が知るシーボルトが、嗚呼忠臣楠子之墓に詣でているではないか。しかも、正成のことを知っており、「かの有名な戦士楠木正成」「名将」「船乗りの守護神」「神と崇められた武將」と称賛、記していたのである。

日本研究の使命を帯びて来日

南ドイツ、バイエルン出身のシーボルトは、イギリスが占領していた旧オランダ領東インドを 1814 年にオランダに還付、そしてオランダはこの時日本とオランダの貿易を企て、そのため日本の国民・制度・国土・産物等の総合的研究が必要となり、日本研究の使命を帯びて日本に入ったのである。(人物叢書「シーボルト」板沢武雄著より)

同書によると、シーボルトの研究の中心は自然科学であることは勿論の事、バタビヤ文書館宛ての報告書

(1825 年 12 月 2 日付) は、宗教、風俗習慣、法律及び政治、農業、地理及び地図、芸術及び学問等広範囲にわたるものであった。

だから、江戸参府紀行には、江戸時代末期当時の日本の様子をうかがわせる多くの件が載っている。

例えば、3 月 16 日の件には「郵便」の事が記されている。

— 速達で手紙をここ(筆者注 大坂)から国中に通じ、ことに首都である江戸と京都、外国人の貿易都市である長崎へ送られ、その制度は日本商業の中心地大坂では特によく整っている。

ここでは決まった郵送の日があって、日本の月で、毎月 7・17・27 日は長崎へ、8・18・28 日は京都や江戸までとなっている。この定期便は大坂から下関を経て長崎まで 7 日でゆく。そのうち、下関までは船足の速いたくさん漕ぎ手のをせた小さい幌舟でゆく。ここから郵便物は陸路を進む。一定の宿駅がおかれていて、荷物を枝にくくりつけ、走り手が先へ運ぶ。この運び手は次の駅まで急いで走り、荷物を引き渡すとすぐに先へ運ばれてゆく。

私はたびたびこういう飛脚を見た。この定期便の他にいつでも海上を下関へ、陸路を他の地方へ手紙を出すことができ、送料 50 ～100 グルデン、事情によってはもっと高くかかる。

広く瓦版等から正成のことを知ったか

日本研究の使命を帯びて来日したシーボルトは、動物や植物、地理などはもちろんの事、当時の日本社会を目の当たりにし、庶民文化にも接した事だろう。講談、芝居等を見聞しただろうし、瓦版や表紙物も手にしただろう。

江戸幕末の尊王攘夷の運動が盛り上がりを見せる 30～40 年も前に日本を訪れたシーボルトが、楠木正成のことを知っていたのはこういう事情からと推察できる。

このシーボルトが、「かの有名な戦士楠木正成」と記していることを、広く広めなければならぬと思う。今や日本を訪れる外国人が年間 3000 万人を超えるようになったが、徳川家康や織田信長同様に、楠木正成が広く知られるようになり、皇居前の銅像を見て、『これはかの有名な戦士楠木正成だ』という外国人が一人でも多く増えることを願うばかりである。もちろんの事、日本人もであるが・・・。

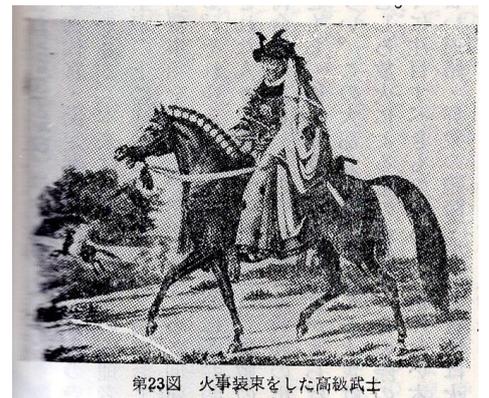
さて、日本参府紀行の件には、正成は歯痛の守護神と記されているが、これはおそらく、正行の従兄弟、和田賢秀との混同と思う。和田賢秀は、最後敵を睨みつけ、敵に噛み付いて亡くなって逝ったことから、「歯噛みさん」と親しまれ、四條畷市内の和田賢秀墓に参る人が絶えない。

また、正成は船乗りの守護神でもあったと記されているが、



第 4 図 オランダ商館員の江戸参府の行列

シーボルトにも、かつて畿内の運輸流通業(陸運・水運)を取り仕切った正成の活躍の事が伝わっていたのではないか。



第 23 図 火事装束をした高級武士

結ばれた女性が“楠本”姓に縁を感じる

シーボルトは、長崎で楠本滝という女性と巡り合い、娘、イネをもうけている。その女性が“楠本”姓であったことも、私からすれば、シーボルトと楠氏の縁を感じられずにはいられない。

(写真はいずれも、平凡社刊「江戸参府紀行」より転載)

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)